



マンドリン演奏で心とむひと時を



来年3月6日の「同窓会20周年を祝う集い」の催し物に、所沢マンドリンクラブの出演が決定しました。所沢マンドリンクラブは1975年創立で、所沢、狭山、入間、東京在住の20代～80代（ほとんどはシルバー世代）のマンドリン好きの仲間約50人で演奏を楽しんでいる音楽サークルです。定期演奏会、地域小演奏会、他のマンドリン団体とのジョイント演奏会など多彩な活動をしています。新型コロナウイルス感染症の影響で去年は練習が休みとなり、定期演奏会も中止となりました。その間、Web会議やおうち演奏会で会員間の繋がりを保っていたそうです。移動時間や会議場所の心配も不要という思わぬ収穫もあったとか……、あくまでも前向きです。今年5月に2年ぶりの第41回定期演奏会を開くことができたそうですが、全員マスク出演だったそうです。

皆様には12月中旬に「20周年を祝う集い」の案内をお届けします。当日はマンドリンクラブの楽しいお話と懐かしい曲が披露されます。どうぞお楽しみに！



● 私のTokyo 2020 ●

あれは何年前だったのでしょうか？ IOC会長の「トキョ」の発表に日本国民は大喜びしたものでした。そして、ゴルフの会場が狭山市に決定しました。ボランティアの募集、聖火リレー狭山コースの決定……とTokyo 2020へ向けての期待はいやがうえにも盛り上がりました。

特に小生が期待を膨らませたのは、教え子の松原幹君の「聖火ランナーさやまコースの第1走者決定」でした。彼を担当したのは今から35年前のこと。当時の狭山市内の中学校は、暴走族(特攻狭山)・シンナー吸引・対教師暴力が吹き荒れる凄まじい時代でした。そんな中、私は生徒指導主任として充実した日々を送っていました。元気だった彼も今は50歳ですが、30代半ばに筋萎縮性側索硬化症(ALS)に襲われ、言葉も発せず寝たきりの生活となってしまいました。しかし、彼は大変ご立派なご両親や支援者に支えられて、積極的に社会活動に参加し、Tokyo2020の聖火リレーにも挑戦したのです。これに水を差したのがコロナ禍によるTokyo2020の1年延期です。その後も、開催の危ぶまれる事態になりました。

この状態に、私は気が気ではありませんでした。それでも、オリンピックは何とか実施にこぎつけ、狭山市駅前で見守ることができました。

写真左は西武文理大学看護学部での講義「患者さんから看護師さんへ」後の記念写真、右は聖火リレー当日の雄姿です。私のTokyo2020でした。

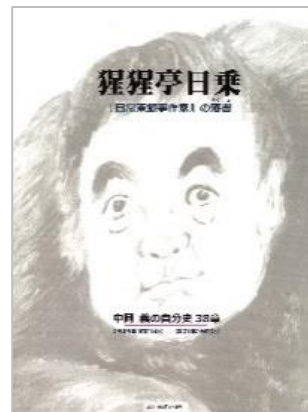
(生きがい学科9期 鈴木 強)



今回は、今年6月に自分史『猩猩亭日乗—中岡義の自分史38章』を上梓された中岡義さんの紹介です。

元気に活動中！ 自分史を書こう 中岡義さん

私は3年前に自分史の編纂に着手してからは、この作業に指一本触れなかった日はありませんでした。それが生き甲斐でもありましたが、最大の懸念はこちらが先に逝ってしまわないかとの焦りでした。なんとか82歳の誕生日に間に合わせる事ができたのは、だましだまし従わせた自分の体の賜物で感謝あるのみです。あれもこれもと欲張り、400頁を超える大冊になってしまいましたが、加えてもう1つ感謝するとすれば、コロナ禍のメリットです。「stay home」を強要され、「不要不急」を取り混ぜ、「外出を自粛せよ」と言われれば、安全なのは「農耕接触」ぐらいが精々で、パソコンを相手にするのがもっばらでした。本書作りには、まさにコロナ様々だったのです。寄贈した「自分史図書館」の『新着案内』をご紹介します。



「人生100年時代、90歳まで社会に役立たねば」

当館所蔵の自分史では五指に入る大作である。前から、途中から、後から、頁を繰ってみるがボリュームと内容からとても凡人の手に負えるものではないと悟った。筆者の軌跡とこの本に込めたエネルギーを紹介するには力不足です。どの頁を切り取っても後々歴史的に貴重な資料になることは間違いありません。(中略) 釈迦に説法ながら当館から一言。人生百年時代は社会に遅れないため20代、50代、70代と3回大学に入ったつもりで新しい知識を吸収し、90歳まで社会の役に立たなければなりません。筆者はまだ82歳、残り時間は十分過ぎるほどあります。続編を鶴首してお待ちしています。(東邦次郎)

＜自分史図書館（筑後市）自分史を中心に3,000冊を収集・展示している＞

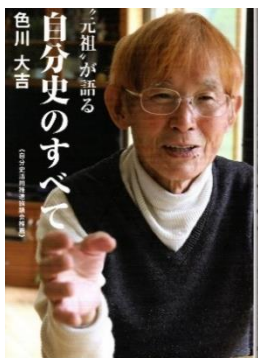
刊行して4カ月が経ちましたが、この間に尊敬する色川大吉さんと立花隆さんが亡くなりました。ともに「自分史」に卓見を持たれ、著作もある方です。私が編纂中にお二人の著作を読んでおれば、多少の影響があったかもしれませんが、迂闊にもそれを知ったのは刊行後でした。

しかし、大筋においては、結果的に両人の見識とは大きく外れておらず、甘く見て2割ぐらいいは満たしているのではないかと自分に言い聞かせて、胸をなでおろしています。自惚れでしょうが……。

ご二人の著作を紹介しますが（敬称略）、お二人ともシニア世代はぜひ「自分史」を書くよう推奨されています。私は立花の説にはほぼ同意できます。だから、改めて立花の手順に従って書いてみたいとの思いは、なくはないのです。ただ、叶うことなら、立花隆に講評をしていただければ、もう死んでもよかったのですが……。同窓会の諸兄弟におかれましては、「自分史」に挑戦してみてもいいでしょうか。

「自分史」の生みの親である色川大吉が説く、その書き方と極意とは

色川は9月7日に老衰で亡くなられたが、96歳でした。東京経済大学名誉教授でもあり、自由民権運動などの民衆史の研究をリードされた歴史家で、社会運動家でもありました。1975年刊行の『ある昭和史 自分史の試み』（中央公論。中公文庫あり）で、庶民の個人史から全体状況を浮かび上がらせようとする「自分史」を提唱しました。色川が伝授するその極意とは—— ①自分史はどこから書き始めても良い。書き方も自由で、気楽な気持ちで ②下手でもいいから速く書くこと。一度ペンを止めると文章に力がなくなる ③「自分史」の中でいちばん人に共感されるのは失敗談 ④人生は矛盾だらけ。良いことも悪いことも、まずは書き出してみる ⑤親の書いた自分史を子供が手伝うと、見栄や勝手な感情が入りやすい——。



立花隆はシニアの誰にも「自分史」への挑戦を推奨する

4月30日に80歳で亡くなった立花隆の著作に、まさか『自分史の書き方』（講談社学術文庫）があるとは思いませんでした。この本は、立教大学に2008年に生まれたシニア世代向けのコース『立教セカンドステージ大学（RSSC）』で、立花が開講した「現代史の中の自分史」という授業の実践の記録なのです。立花は大学の授業で、受講生43人の全員に自分史を書かせるのですが、次週にその内容を講評しながら、いい自分史の書き方を伝授していきます。実はこの冊子の大半は受講生の具体的な原稿を掲示して、それにコメントを付けるのですが、これが読み物としてもどれもめっぽう面白いというか、上手く書かれています。立花はこれを、【手順さえ間違えなければ誰にでも書けるということである】と言われます。

